

6 牽牛と織姫

イエンナル イエンナレ (옛날 옛날에…むかしむかし)

天の国に牽牛と織姫がいました。二人は幼い時から、とても仲良しでいつも一緒に遊んでいました。織姫はだんだん成長していく頃から、機織りを習わされて毎日、機織りをしていました。織姫は、とても機織りが上手で、天の国の中で一番の腕前でした。織姫が毎日織り上げる布の立派なことを、王さまはいつも褒めていました。

牽牛と織姫は、若者と娘に成長して、互いに愛し合うようになりました。そして二人は結婚しました。牽牛は妻が毎日、機織ばかりしているので、ある日、

「ヨボ (あなた)。チツニヨ (織姫)。こんなに良い天気だよ。いつも朝から晩まで機織ばかりしていて、そんなに部屋の中にいるのは、良くないんじゃないの、たまには一緒に遊びに行こう」

と誘いました。でも、それでも織姫は、

「ヨボ (あなた)。キョヌ (牽牛)。ありがとう。でも今日は、どうしてもここまで織らなければならぬのよ。今日はまだ織っていないので、遊びに行くことは出来ないのよ」

夫が誘っても、織姫は外に行きませんでした。

「ヨボ。どうしてそんなに機織りばかりしているんだい」

「これが私の仕事なんですよ」

そうして織姫は一心に、機織台の前で仕事を続けました。牽牛は誘い出したいくなりません。

「ヨボ。さあ今日こそ遊びに行こうよね」

それでも、毎日毎日夫の牽牛が誘うので、たった一度のつもりで遊びに行きました。また帰ってから織るつもりでした。でも次の日も牽牛に誘われて、遊びに出て行ってしまいました。次の日も次の日も、織姫は機織りを忘れて遊び歩いていました。

ある日、天の王さまが来て、織姫に仕事を命じました。

「チツニヨ (織姫) や。これはとても大切な仕事だからね。大切なおまつりの時に使う布を織りなさい。この布はとても大切だから、必ず約束の日まで織り上げなさい。わかりましたね。チツニヨや」



「はい。王さま。わかりました」

と答えて、織姫は機の前に座るとすぐに織りはじめました。その時、また夫の牽牛が入って来ました。そして、

「チッコ。さあ行きましょ。遊びに行こう。今すぐに外へ出かけるんだ。こんな良い天気なのに、どうして機織りなどしているんだ。さあ機の前から離れよう」

「キヨヌ（牽牛）。今日は遊びに行かれませんか。王さまから、おまつりの日まで布を織るように命じられたのですから。今日は、それを織らなければなりませんので、私は遊びに行かれないですよ」

「でも、とても美しいお花畑があるんだよ。チッコ。ちょっとだけ行ってみようよ」

牽牛は誘いました。あまり誘われて、織姫は気が動きました。そして遊びに行ってみようと思いましたが、

「ちょっとだけ見て来ようかしら。見たらすぐ帰ってしまえばいいんだもの」

そして二人は仲良く野原に遊びに行きました。織姫は牽牛と楽しく語り合い、花畑の花を眺めていました。そして花を見て遊んでいるうちに、暗くなってきました。大急ぎで機織りを思い出して帰りました。帰ってすぐに機織りにかかりましたが、もう布を仕上げるころまでいきません。布はまだまだ不足なのでした。大急ぎで仕事をしましたが、もう

間に合いませんでした。そこに王さまが入ってきました、もう約束の時間が来たのです。

「おまつりに使う布は織っているかね。チッコ。もう織り上がっているだろう。約束の時だよ。もう布は織っていることだろうけど。さあ、お出し」

織姫は、もう駄目だと思いました。王さまが布を受け取りに来たというのに、まだ半分しか織ってはいなかったのです。織姫は遊び過ぎてしまったことに気がつきませんでした。

「王さま。申しわけありません。まだ約束した布は織り上げていません」

「何だって、チッコ。どうしたというのだ。おまえはとも立派な織り手ではなかったか。この天上の国で、おまえほど機織りの上手な織り手はないと言われていたのではなにか。どうして、そんなに怠け者になってしまったのか。こんなに変わったのは、夫のキヨヌのためだろう。二人は結婚して一緒に暮らすのは、もう止めなさい。キヨヌとは別れて別に住みなさい。チッコ。わかったか」

王さまは約束の布が完成していないので、本当に怒りました。そして二人に罰を与えたのです。牽牛と織姫を別れわかれにしまいました。二人は泣きながら別の星に、遠く離れて暮らすように命じてしまいました。そして陰暦の七月七日は、一年に一度だけ逢うことが許されました。そうしてその日、七月七日、二人が逢う日には、泣いて泣いて二人は自分たちの運命を悲しみました。それでその涙がたくさん降りました。その雫が

露になって落ちて、びしょびしょで露にぬれて下界の人たちが困りました。それで王さまも困りました。二人が泣いた涙が川になって流れ、星をたくさん流しました。天の川になって、涙が次から次へと星を流して流れました。

それで鳥たちは、二人を助けようと、相談しました。そして、

ガチ（かささぎ）とガマガ（鳥）は、天の川に橋をかけてあの二人のために、橋になって、二人を逢わせてやることにしました。

それで、ガチとガマガは頭を揃えて並んで、天の川の橋になりました。鳩もやってきて、同じように橋になりました。そして牽牛と織姫は橋を渡って、二人は天の川の橋の上で一年に一度会って、つもる話をしたのでした。二人が歩いた鳥たちの橋は、オジャキョー（烏鵲橋）と言いました。その橋になった鳥たちの頭の毛が二人の歩いた履物でこすれて、すっかり白くなってしまいました。

それで今でも、韓国では陰暦七月七日前になると、かささぎ、鳥、鳩たちなどが姿を消します。そして七月七日、牽牛と織姫を橋になって渡らせた後に、また現われるといいます。鳥たちは、頭の毛が白く抜けたような姿で、再び姿をみせると伝えられています。

クー（これでおしまい）。

7 賢い王妃



イエンナル イエンナレ (옛날 옛날에..むかしむかし)

ある国に、賢い王さまが住んでいました。王さまには、一人の息子がいました。その王子が大きくなって、いよいよお妃を迎えることになりました。王さまは王子のお妃を選ぶために、大臣たちと相談して、国中におふれを出しました。

「王子のお妃を選ぶことになったので、ヤンバン（貴族）の娘たちは、全員宮殿に来なさい」

と、いうわけです。国中の人たちは、王子のお妃に注目しました。娘を持っている人たちは、みんな自分の娘を王子のお妃にしたいものだと思います。でも、その国では貴族の娘でないと、お妃にはなれませんでした。

いよいよ、お妃を選ぶ日がやってきました。ヤンバンの娘たちは、美しい衣装を着て、

明淑さんの

むかしむかし

野村敬子編

語り: 庄司明淑 採集協力: 山科千代・須藤敏枝

